

マス・コミュニケーション・プロセス

における対抗文化論序説

——現代の「送り手／受け手」の関係性をめぐって——

前 田 益 尚

0. はじめに

マス・メディアの厳然たる介在により、嘗てのハイ・カルチャー High Culture／ロー・カルチャー Low Culture (≡ポピュラー・カルチャー Popular Culture) の位相階層化 (classification) は、マス・カルチャー Mass Culture として普遍的 (universal) に収斂されてしまったのであろうか… (拙稿 [1992])。

また、現行上意下達のマス・コミュニケーション・システムにあっては、送り手／受け手のエートス ethos は互いに自律性 (autonomy) を確立し得ず両者に通底する文化的イデオロギーの呪縛 (背後に控える“意識産業 Bewusstseins-Industrie”; H. M. エンツェンスベルガー [1962]) を脱し得ないのであろうか…。

本稿は、マス・コミュニケーション研究における送り手志向の効果概念の下、一元的に論じられがちであった「受け手論」や、「カルチュラル・スタディーズ Cultural Studies」諸説等が提起した前述イデオロギー支配の知見に対して、戦略的 (理論的) に受け手の受容プロセスの位相**多元化→受け手の自律的対抗文化構築**を志向するものである。更に当該試論のブレイク・スルー break through を見出し得たとして、その地平に分断されたかに見える送り手の自律性 (autonomy) の行方と、厳然として上意下達の社会情報流通システムを維持している現行のマス・コミュニケーション・プロセスの中で、送り手／受け手の関係性 (Verhalten) はいかにして紡ぎ紡がれ得るのか探究を巡らせてみたい。

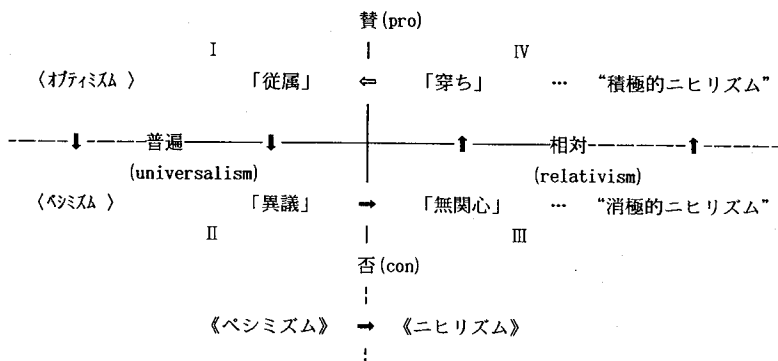
1. 受け手の受容プロセスの位相変動 (drift) をめぐって—

まず先容ながら、受け手の受容プロセス多元化の戦略 (strategy) 上、永年のマス・コミュニケーション研究諸説を省察 (overview) し、当該学究におけるフレーム内で「受け手像」の理念化 (idealisieren) 可能性を予見させるモデルのみを恣意的 (strategic) に採出し4分する。①皮下注射モデル or 弾丸効果モデル【強力効果説】、②フィード・バック・モデル【インタラクティビティ interactivity 志向諸説】、③マス・コミュニケーション (or マス・メディア) の麻酔的逆機能モデル【社会心理主義諸説】、④「利用と満足」諸研究モデル【相対主義諸説】。

各々におけるセクショナリズム sectionalism への囲い込みは、多分に折衷的 (eclectic) 便宜性を禁じ得ないものではあるが、理論構築の本源志向性として与件を仮説されて来た「二元論」に端緒を得たアジテーションの作業工程 (sophistication) と側聞戴きたい。

さて、臙影ながらも恣意的 (strategic) に析出されつつある受け手像 4 類型の確立には留保を与えつつ、先験的ながらマス・コミュニケーション・プロセスにおいて送り手のメッセージに対する受け手の受容スタンス stance を前出「二元論→四元論 (マトリックス matrix)」に準じ位相分化¹⁾を試みしてみる。

先ず、タテ軸に発信主体 (図—1 & 2 においては送り手、図—3 においては受け手) の恣意に対する受容主体 (図—1 & 2 においては受け手、図—3 においては送り手) の「賛意 (pro) / 否意 (con)」を²⁾…、次に、ヨコ軸に送り手／受け手に通底する思潮の所在を「普遍主義 (universalism) / 相対主義 (relativism)」と³⁾、設定する。



図－１ 送り手のメッセージ (encode) に対する受け手の受容 (decode) 類型

註：座標軸の設定に関しては，稲増龍夫 [1985, p181] のフレーム・ワークを参考にさせて戴いた。

★解題：

- I：送り手の意図 (intention) した意味 (meaning) を無批判に受け容れる。
- II：送り手の意図した意味を解釈 (interpretation) した上で，批判に転じる。
- III：送り手の意図した意味を解釈しようがしまいが，無関心 (apathy) に帰する。
- IV：送り手の意図した意味を解釈した上で，その意図さえもメタ受容してしまう。

4 位相 (図－1) の意味付けを概説すれば，先ず送り手中心主義⁴⁾の位相を，送り手のメッセージを普遍的に肯定 (pro) する受容スタンス＝『従属』，送り手のメッセージを普遍的に否定 (con) する反受容スタンス＝『異議』，と設定する。次に非常にセンシティブ sensitive な受け手の感受性の理念化 (idealisieren) ではあるが，受け手中心主義⁵⁾の位相を，送り手のメッセージを否定 (con) し更に相対化してしまう反受容スタンス＝『無関心』，送り手のメッセージを相対化しながらも意味レベルでは肯定 (pro) してしまう受容スタンス＝『穿ち⁶⁾』，と設定する。

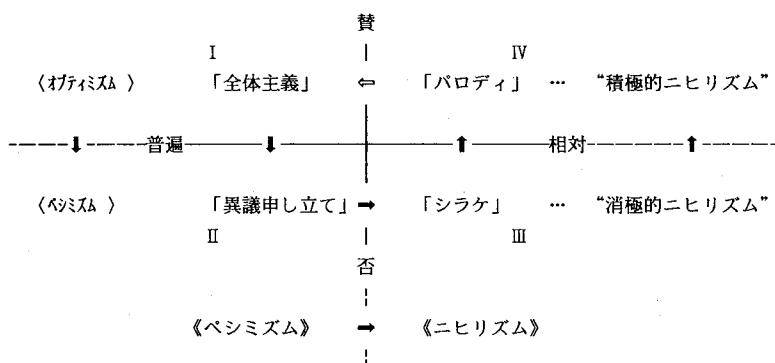
この様な類型化の与件には実証的研究データの裏打ち，若しくは当該

表層現象の採出が不可欠ではあるが、本章においては「受け手の対抗文化」造成のモチベーション motivation の所在を明示する為に敢えて、思考実験 (gedankliches Experiment) 的に仮説してみた。対抗文化現象諸相に関しては、次章に示唆を含めてみたい。

2. 受け手の受容文化の位相変動 (drift) をめぐって—

J. アンリオ [1969] は、「遊び (Le Jeu)」とは相対化の所産に他ならない、と定義している。卑俗な言明を許与、もし仮に現行マス・コミュニケーション・プロセスにおいて、受け手が送り手の支配 (manipulation) を「もて遊び」(相対化≡自律性 autonomy 志向)、自律的対抗文化を構築し得るとするならば、如何様な文化形態 (体系) が想定し得るのであろうか。

本章においては、受け手の受容 4 位相をモチベーション motivation に喚起された (され得る) 文化形態モデリングを試みる。



図－2 送り手の文化侵略 (manipulation) に対する受け手の対抗文化類型

★解題

- I：送り手の大衆操作 (manipulation) に対し、従順に対応 (反応 reaction) する事によって秩序維持。
- II：送り手のイデオロギー再生産要求 (manipulation) に対して、異議申し立て運動。
- III：送り手との断絶。

Ⅳ：送り手の操作 (manipulation) に対し従順に反応 (ex：視聴率，発行部数の安定) しているかに見せ (秩序維持) て，その実，送り手の意図 (intention) こそを受容文化の対象として素材化 (materialize) してしまう相対主義ムーブメント。

4位相 (図-2) の意味付けを表層文化現象に則して概説すれば，第一に40年代 (ex：W. W. II) に隆起した「ファシズム」の席捲，マス・コミュニケーション・プロセスに鑑みると送り手の「宣伝・プロパガンダ」戦略に包摂 (involve) された文化形態 (カウンター・カルチャーなきメイン・カルチャー) = 『全体主義』。第二に，60年代後期に渡り先進諸国間で隆盛を極めたカウンター・カルチャー (ex：スチューデント・パワー，自由ラジオ) = 『異議申し立て』 (cf：K. ケニストン [1971])，第三に70年代，「疎外 alienation」という名に準ずる感受性が世に蔓延したカウンター・カルチャー (ex：ヒッピー・ムーブメント，フリー・セックス) の台頭 = 『シラケ』 (cf：藤竹暁 [1972]，井上俊 [1973]，栗原彬 [1981]，笠原嘉 [1984])。第四に80年代，特に日本において開花した相対主義的カウンター・カルチャー = 『パロディ』 (稲増龍夫 [1985]) …と設定する。

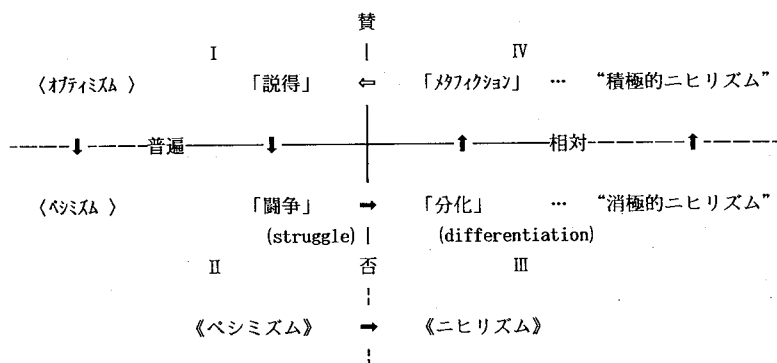
ここに至り，特に対置的に言及しておきたいのは，「象限Ⅱ ↔ 象限Ⅳ」 (図-1 & 2 に通底して…) 関係である。マス・コミュニケーション・プロセスにおける受け手の優位性 (The Superiority of Mass Audience) 構築の端緒として模索されて来た，受け手の「能動性 (≡ interactivity：受け手の送り手化)」 ↔ 「自律性 (autonomy：現マスコミ体制内における受け手のメタ受容化)」という，前出二元論に則した対概念 (拙稿 [1993]) を「象限Ⅱ ↔ 象限Ⅳ」に照応出来よう。

さて，1章 & 2章を通じ論及して来た受け手の対抗文化諸相は，所謂社会変動論に準じて言えば「漂流変動 (drift)」として涉猟し得るものであった。対して当然予見される送り手の「計画的変動 (strategy)」 (メタ対抗文化) は如何にして画策されて来た (され得る) のか…次章において更なる探究を深めてみたい。

3. 送り手の対受け手戦略の位相 (計画的) 変動をめぐって一

受け手の対抗文化が自然発生的 (spontaneous) 諸相として省察し得た

のに対して、「意識産業 Bewusstseins-Industrie」たらんとする送り手は如何なる拮抗策（処方箋）を講じ得た（得る）のであろうか。本章では、送り手における自律性（autonomy）獲得問題に関わらせつつ、「受け手」の漂流変動を支配（manipulation）下に置こうとする送り手の計画性を採出してゆきたい。



図－3 受け手の対抗文化に対する送り手の戦略 strategy 類型

★解題

- I：意味伝達のコミュニケーションに終始。
- II：コミュニケーション手段の争奪。
- III：名望家支配（Honorationrenherrschaft）への志向（orientation）。
- IV：送り手のコミュニケーション自主管理（autonomy）化。

4 位相（図－3）の意味付けを概説すれば、第一に、送り手の啓蒙主義的モチベーションに裏打ちされた、正に説得（persuasion）のコミュニケーション計画＝『説得』（cf：C. I. ホブランド [1953]）。第二に、G. オーウェル [1949] 等が既に受け手サイドから送り手の「管理」志向性を揶揄・予見して来た（ネオ？）マルキズム的コミュニケーション観＝『闘争（struggle）』。第三に、V. パレート [1900] が若干のニヒリズムと当該情況に「周流（circulation）」という留保を与えた（送り手の）エリートイズム elitism 獲得＝『分化（differentiation）』。第四に、送り手の対受け手（マス）コミュニケーション戦略（strategy）の諦観、即ち送り手集団内コミュニケーションの自己完結（メタ対抗文化形成）＝『メタフィクシ

ョン』(P.ウォー [1984]) …, と設定する。

ここまで、受け手の受容スタンス→受容文化の漂流変動 (drift) と、それに対して送り手が画策 (manipulation) する戦略 (→文化) の計画的変動を両義的に様相探究して来た。しかし、その地平には図—1, 2, 3を照応させ紡ぎ紡がれる「送り手／受け手」の関係性 (Verhalten), ひいては『現代メディア文化』(拙稿 [1992]) の構造変動論に探究を及ぼし得よう。

4. 「送り手／受け手」関係 (Verhalten) の位相 (紡錘型) 変動をめぐって—

上記, 図1, 2, 3にモデリングされた位相…。本章においては各象限毎の照応, 即ち「送り手／受け手」の関係性 (Verhalten) を紡織して, マス・コミュニケーション・プロセスにおける『送り手／受け手』構造の移相 (包摂 involve された象限 $I \rightarrow II \rightarrow III \rightarrow IV$ 運動) を省察してみたい。

I → II :

マス・コミュニケーション研究史諸説において, 特に現在はジャーナリストイックにも継承されて来た問題意識 (issues), 「情報の片流れ (one-way communication)」→「一極中心の送り手 vs. 多数周縁の受け手」階級闘争 (class struggle) 論は, 象限 I への歴史的省察 (大衆操作のイデオロギー装置としてのマス・メディア観) から, 象限 II における送り手／受け手両意識 (Bewusstsein) の非平衡系としてマス・コミュニケーション体系 (情況) の混沌時期 (chaos) を迎える。□『ベシミズム pessimism』の到来

II → III :

象限 II において, 受け手の「異議申し立て」→受け手の能動化→インタラクティビティ interactivity 志向, が強いる現行マス・コミュニケーション・システムに対する基盤的 (fundamental) パラダイム・シフト, 当該革新がもたらす確率論的 “リスク & リターン” トレード・オフ trade-off (拙稿 [1993]) の諦観からか, 象限 III における送り手／受け手の階級分化 (Klassenschichtung) が見出される。これを階級対立の制度

化 (Institutionalisierung des Klassengegensatzes) と捉えるか否かに関しては論議の余地もあろうが、本稿においては即断を避けたい。只、象限Ⅲにおける、送り手／受け手の両文化公分母 (common denominator of culture) にニヒリスティックな意識 (Bewusstsein) の萌芽を予見する。□『ニヒリズム nihilism』の到来

Ⅲ→Ⅳ：

象限Ⅱから象限Ⅲにおいて、対立→分断されたかに見受けられる送り手／受け手の関係性 (Verhalten) は、その間厳然としてマテリアル material を堅持する「(マス) メディア Mass Media」(ex：紙、電気 etc.、電子等の素粒子をめぐって…)のマージナル marginal な介在(“送り手／受け手” どちらのコミュニケーション手段であろうとも…)によって公衆 (public) の成立以降、現行する上意下達の社会情報流通回路「マス・コミュニケーション・システム」を崩壊に至らしめる事はなかった。

象限Ⅲにおいて、分化された送り手／受け手両文化は、特に受け手における「精神の(権)力の衰退や後退⁷⁾」(F. W. ニーチェ [1959], 原佑訳 [1967]) がアパシー apathy やシラケ・シンドロームとして精神病理学的対象に貶められながら(“2-Ⅲ 参照”)も、一応の秩序を回復したかに見える。しかし、送り手／受け手の分化 (differentiation) したマス・コミュニケーション・システムとは依然として非平衡系である事には変わりはなく、かと云って象限Ⅰへの回帰は歴史的省察からも不可逆的であり、ここに送り手／受け手の両意識 (Bewusstsein) における「精神の上昇した(権)力の徴候⁸⁾」(F. W. ニーチェ [1959], 原佑訳 [1967]) が要請される。□『“積極的ニヒリズム⁹⁾” への夢想

★表層現象より当該“徴候”を涉獵してみると…

①送り手の“積極的ニヒリズム”諸例

☆英タブロイド紙 'Daily Mirror', 'The Sun', 『東京スポーツ』のメタフィクション戦略 (東スポ探検隊編『東スポ伝説』扶桑社 [1991])。□『Print Media (新聞)

☆80年代フジテレビのメタフィクション (NG 集, 楽屋オチ etc…) 戦略 (フジテレビ調査部編『楽しくなければテレビじゃない』フジテレビ出版 [1986])。□『Electronic Media (テレビ Commercial Broadcasting) etc…

②受け手の“積極的ニヒリズム”諸例

- ☆新聞複数紙を斜読し各紙編集意図を炙り出す事によってニュースの正鵠 (behind the news) を射よう (穿つ) とするリーディング・スタンス (月刊『THE 21/04』PHP 研究所 [1993. 4. 1])。□ Print Media (新聞)
- ☆B級ホラー映画やTVドラマ『スチュワーデス物語』(TBS 系列 [1983. 10~1984. 3]) をパロディとして穿つ受け手像 (稲増龍夫 [1985])。□ Electronic Media (テレビ Commercial Broadcasting) etc...

5. おわりに

前述、図—1, 2, 3における「ポジショニング・マップ」の位相変動 (⇒) が時系列的に扱われている事に対しては異論も多出しようが、『現代メディア文化』の構造 (体系) が散逸状態を経て秩序に収斂させる過程 (文化段階 Kulturstufe) を不可逆的にスケッチした試論 (4章参照) と御理解戴ければ幸いである。

さて、前述象限Ⅳにおける「送り手／受け手」の自律性 (autonomy) 獲得＝“積極的ニヒリズム”の徴候を、その地平と仮説するならば…、送り手／受け手は互いに作用し合う支配 (manipulation; ex. 「説得」 & フィードバック) を軽減しながら、現行マス・コミュニケーション・システムを柔構造化しつつあるのではないのであろうか。

J. ボードリヤール [1970] がシニフィエ signifie なきシニフィアン signifiant が蔓延する「現代メディア文化」(特に象限Ⅳの様相) をペシミスティックに評した「シミュレーション文化論」も、ともすれば位相変動の自明的帰結として、隣接する象限Ⅰへの回帰 (図—1, 2, 3における“⇐”) 可能性 (ニヒリズムからファシズムへ¹⁰⁾…) を予感した先見的アジテーションなのかも知れない…。

しかし象限Ⅳへの移相を見る限り、送り手は穿たれる事を承知の上でメタフィクション的エンコード encode (受け手にとってはシニフィエなきシニフィアンの受容…) を、受け手はメタフィクション化される事を承知の上で「穿つ」デコード decode (結果として、送り手にとってはシニフィエなきシニフィアンの発信…) を…、という一種「儀礼としての相互行為 (interaction ritual)」(E. ゴッフマン [1967]) の重層的展開¹¹⁾の地平にオプティミスティックな「シミュレーション文化」の萌芽を予見する。

更に私見を恐れずボードリヤールのペシミズム pessimism に答えるならば、表層現象渉猟の作業工程において、既に象限Ⅳから象限Ⅰへの回帰(図一1, 2, 3内“ㇿ”)現象は見取れる。例えば、評論家(pundit)とは言わないまでも、特に雑誌媒体に躍る所謂コラムニスト諸氏の「穿ち」の視点を擁した言説活動¹²⁾は、マス・コミュニケーション研究における「二段の流れ仮説」(E. カッツ & P. F. ラザースフェルド [1955])に倣えば、受け手サイドのオピニオン・リーダーとして捕捉し得るのか…、それとも「意識産業 Bewusstseins-Industrie」たる送り手サイドに囲い込まれた扇動者(agitator)なのか…、本稿のテーマでもあった「送り手／受け手」の関係性(Verhalten)探究の地平にマージナル・マン marginal man の見出しは、更なる問題の複雑さ(sophistication)を予見させよう。当該問題(issue)の検討は今後の課題に委ねるとして、前出マージナル・マンの存在(presence)が確定すれば、ボードリヤールのペシミズムは本稿象限Ⅳ→Ⅰという回帰図式(ニヒリズムからファシズムへ…)を回避出来、少なくとも不可逆的に論及して来た本稿の地平に更なる論理階梯を昇る事になろう…。

註

- 1) 4位相分化の独善性に関しては異論も多出しようが、今後「様相論理学」等に論拠を求めてみたい。また、本稿の外援としては小林盾[1992]の4行為様相モデリングを参照させて戴いた。
- 2) 図一3においては、マス・コミュニケーション・プロセスにおける対抗文化の第一義的主体たる「受け手」の恣意を送り手の戦略 strategy 対象と想定した。
- 3) 特に、文化研究において二元的に論じられる「普遍主義／相対主義」という基軸をマス・コミュニケーション研究に援用、送り手／受け手双方が自らの恣意を敷衍しようとする思潮を「普遍主義(universalism)」, 対概念に「相対主義(relativism)」を使用した。
- 4) 5) 当該ラベリングの与件としては拙稿[1993]を参照されたい。
- 6) 「…民衆を『受け手』として規定することは、民衆のバイタリティを送り手がみそこなうことになる。…(中略)…民衆を核として送り手の視点を構築し、上から下へという制度的なコミュニケーションを逆転させる方法は、日本において古くから定式化されてきた。それは『穿ち』という言葉にあらわされている方法である…」(山本明[1969], p 188)

- 7)8) ニーチェのニヒリズム研究諸説においては、'Der Wille zur Macht'を「権力への意志」と捉えるか(原佑訳 [1967]), 「力の意志」と捉えるか(湯浅博雄訳 [1985])に論議の余地を残している。しかし本稿においては「対抗文化論」の文脈上、送り手/受け手のヘゲモニー hegemony 対立構造を照射する為のフレーム・ワークとして、敢えて括弧付きながら「権力への意志」という解釈を採用した。
- 9) 従来、ニーチェ研究諸説においては、ニヒリズムの二層を「受動的ニヒリズム/能動的ニヒリズム」と解釈されるのが一般的である。しかし本稿マス・コミュニケーション研究の文脈においては、「受動的/能動的」という用語使用が招く誤解 (fallacy) の危険性を回避すると共に、本稿がニーチェ研究を志向しているものではないという便宜性、即ち「送り手/受け手」両意識 (Bewusstsein) の拠を探究する為のフレーム・ワークとして、敢えて「消極的ニヒリズム/積極的ニヒリズム」という用語を使用した。
- 10) ニヒリズム批判として定説化している言明に、ファシズムへの思潮という危惧がある。これに対しては5章後半で、現代のマス・コミュニケーション・プロセスにおいては、諸相多元化の現状に鑑み、若干の示唆を含めた反論を試みた。
- 11) 送り手↔受け手のインター・コミュニケーション inter-communication の地平に現行マス・コミュニケーション・システムを柔構造化出来るとすれば、それは即ち本稿の与件として説難ではあった(拙稿 [1993] 参照)が、概説すれば「メタフィクション」↔「穿ち」といった一種「暗黙知 (tacit dimension)» (M. ボランニー [1966]) のレヴェルにおけるコノテーション connotation 通交 (inter-communication) が、送り手/受け手双方に所謂「意味伝達のコミュニケーション」の呪縛を解き放つ審美関係 (ex: ≪キャンブ≫; S. ソンタグ [1966]) を定立し得るのでは…と私見を提出したい。
- 12) 「穿ち」の視点を擁したコラムニスト諸氏の言説活動諸例に関しては、拙稿 [1993] の註 (13) に列挙している。参照されたい。

★参考文献★

- Althusser, L., 1976, *Idéologie et appareils idéologiques d'État*, Positions, Paris, Editions sociales. [西川長夫訳『国家とイデオロギー』福村出版, 1975]
- Arendt, H., 1951, *The Origins of Totalitarianism Part Three Totalitarianism*, Harcourt, Brace & World, Inc. [大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起源 3』みすず書房, 1974]
- Baudrillard, J., 1970, *La Société de Consommation Ses Mythes, Ses Structures*,

- Editions Planet. [今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店, 1979]
- , 1981, *Simulacres et Simulation*. Editions Galilée. [竹原あき子訳『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局, 1984]
- Castoriadis, C., 1975, *L'institution imaginaire de la société*, première partie *Marxism et théorie révolutionnaire*, Seuil. [江口幹訳『社会主義の再生は可能か—マルクス主義と革命理論』三一書房, 1987]
- Certeau, M. D., 1980a, *L'Invention du Quotidien I, Art de Faire*, U. G. E., coll. 10/18 [山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』国文社, 1987]
- , 1980b, *La Culture au pluriel*, Christian Bourgois. [山田登世子訳『文化の政治学』岩波書店, 1990]
- Deleuze, G., 1965, *Nietzsche*, Presses Universitaires de France. [湯浅博雄訳『ニーチェ』朝日出版社, 1985]
- Enzensberger, H. M., 1962, "Bewusstseins-Industrie," in *Einzelheiten*, Suhrkamp Verlag. [石黒英男訳『意識産業』晶文社, 1970]
- Festinger, L., 1957, *A Theory of Cognitive Dissonance*, Row, Peterson and Company. [末永俊郎監訳『認知的不協和の理論—社会心理学序説—』誠信書房, 1965]
- 藤竹暁, 1972, 『シラケ時代の文化論』学藝書林
- Goffman, E., 1967, *Interaction Ritual : Essay in Face-to-Face Behavior*, Anchor Books, Doubleday and Company Inc. NY. [広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局, 1986]
- Henriot, J., 1969, *Le Jeu*, Presses Universitaires de France. [佐藤信夫訳『遊び』白水社, 1986]
- 平井正, 1991, 『ゲッペルス—メディア時代の政治宣伝』中公新書
- 平野秀秋・中野収, 1975, 『コピー体験の文化』時事通信社
- Hovland, C. I., Janis, I. L. and Kelley, H. H., 1953, *Communication and Persuasion-Psychological Studies of Opinion Change*, Yale UP. [辻正三・今井省吾訳『コミュニケーションと説得』誠信書房, 1960]
- 今田高俊, 1987, 『モダンの脱構築』中公新書
- 稲増龍夫, 1985, 『メディア文化環境における新しい消費者, 『記号化社会の消費』ホルト・サウンダース
- 井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』筑摩書房
- 笠原嘉, 1984, 『アパシー・シンδροーム—高学歴社会の青年心理』岩波書店
- Katz, E. & Lazarsfeld, P. M., 1955, *Personal Influence-The Part Played by*

- People in the Flow of Mass Communications, The Free Press. [竹内郁郎訳『パーソナル・インフルエンス』培風館, 1965]
- Keniston, K., 1960, Youth and Dissent. [高田昭彦・高田素子・草津攻訳『青年の異議申し立て』東京創元社, 1977]
- 小林盾, 1992, 様相・行為・ルール, 『ソシオロゴス』No. 16
- 小林宏一, 1989, メディア論構築のためのエスキース—H. M. エンツェンスベルガーの所説に寄せて—, 『成城大学文芸学部創立三十五周年記念論文集』
- 栗原彬, 1981, 『やさしさのゆくえ=現代青年論』筑摩書房
- McQuail, D. and Windahl, S., 1981, Communication Models for the study of mass communications. [山中正剛・黒田勇訳『コミュニケーション・モデルズ—マス・コミ研究のために—』松籟社, 1986]
- 前田益尚, 1992, 「現代メディア文化論序説—マス・コミュニケーション・システムにおける受け手の自律化をめぐる—」成城大学大学院文学研究科修士論文
- , 1993, マス・コミュニケーション・プロセスにおける「受け手論」の地平—「受け手の優位性」論議をめぐる—, 『年報社会学論集第6号』関東社会学会
- 三島憲一, 1987, 『ニーチェ』岩波新書
- Nietzsche, F., 1959, Der Wille zur Macht. [原佑訳編『ニヒリズムの克服』人文書院, 1967]
- 岡田直之, 1992, 『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会
- Orwell, G., 1949, Nineteen Eighty-four. [新庄哲夫訳『1984年』早川書房, 1972]
- Pareto, V., 1900, Un'applicazione di teorie sociologiche. [川崎嘉元訳『エリート』の周流』垣内出版, 1975]
- Prigogine, I. and Stengers, I., 1984, Order out of Chaos—Man's New Dialogue with Nature, Bantam Books, NY. [伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳『混沌からの秩序』みすず書房, 1987]
- Polany, M., 1966, The Tacit Dimension, Routledge & Kegan P. Ltd. [佐藤敬三訳『暗黙知の次元—言語から非言語へ』紀伊國屋書店, 1980]
- Rauschnig, H., 1954, Masken und Metamorphosen des Nihilismus—Der Nihilismus des XX. Jahrhunderts, Frankfurt/M.-Wien (Humboldt-Verlag). [岩村行雄訳『ニヒリズムの仮面と変貌』福村出版, 1973]
- 佐藤毅, 1990, 『マスコミの受容理論—言説の異化媒介的変換』法政大学出版局
- Sontag, S., 1966, Against Interpretation. [高橋康也他訳『反解釈』竹内書店新社,

1971]

竹内郁郎・児島和人（編），1982，『現代マス・コミュニケーション論』有斐閣大学双書

渡辺二郎，1975，『ニヒリズム』東京大学出版会

Waugh, P., 1984, Metafiction—the theory and practice of self-conscious fiction, Methuen London Ltd. [結城英雄訳『メタフィクション—自意識のフィクションの理論と実際』泰流社，1986]

矢島羊吉，1986，『ニーチェの哲学—ニヒリズムの論理』福村出版

山本明，1969，『反マジメの精神』毎日新聞社